



題字揮毫・故 瀬島龍三氏

第 40 号

公益財団法人 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会

〒102-0073 千代田区九段北3-1-1 靖国神社遊就館内・地階

電話 03 (6380) 8943
FAX 03 (6380) 8952

<http://ireikyou.com>

振替口座 00140-6-334930

編集人 飯田正能
発行人 岩田司朗
印刷所 ヨシダ印刷株式会社

目次

交声曲『海道東征』の復活	1
大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のご案内	1
アリューション群島の戦いと慰霊	3
ガダルカナル島撤退後の	7
中部ソロモン諸島の戦い	7
高砂義勇隊の活躍	11
協議会参加団体の紹介	12
埼玉偕行会―活動状況―	12
事務局からの報告等	14
協議会参加団体の平成29年度	16
慰霊行事予定	16

交声曲『海道東征』の復活

昭和15年(1940年)は、我が国の建国2600年、即ち、皇紀2600年という一大節目の年に当たり、国を挙げての奉祝記念行事が行われた。

神武天皇を祀る橿原神宮は、この年を記念して新社殿の造営が行われ、神武東征に関わる諸行事も大々的に催行された。

この年に、世界に誇る名曲、しかも我が国初の交声曲(オーケストラと声楽)独唱と合唱が一体となった、いわゆるカンタータ「海道東征」が作られた。日本建国の神話を格調高く描いた名曲である。作曲は「海ゆかば」などの作曲で有名な信時潔で、山田耕筰らと共に日本の洋楽の礎を築いた作曲家である。歌詞は、有名な詩人北原白秋が『古事記』や『日本書記』の記述

を基に、作詞したものである。演奏時間50分に及ぶ大曲で、国産みの伝承から神武東征に至るまでを吟唱する8章からなる。

余談ではあるが、筆者はその2年後の昭和17年4月1日、大阪陸軍幼年学校(以下「大幼」という)に入校した(大幼46期、陸士61期生)。同校は、宇垣軍縮により一旦廃校となった(23期、24期生は名幼に移って卒業した)が、昭和15年、皇紀2600年を期して20年振りに、金剛山に程近い大阪府南河内郡河内長野市の千代田台に再興された(43期生。ただし、43期生は、1年間、市ヶ谷台の東幼東分校にあって、昭和16年4月1日、44期生とともに、千代田台の新校舎に移った)。その時、再興を祝して「再興記念歌」と「新校歌」が作られた。作詞は、いずれも同校教官の合作、「再興記念歌」は作曲も同校教官であるが、「新校歌」

大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭のご案内

当協議会は、当協議会参加諸団体と共に、平成29年度の「大東亜戦争全戦没者合同慰霊祭」を左記のとおり執り行います。

記

一 時期 平成29年7月8日(土) (参集殿集合 11時40分)
二 場所 靖国神社

三 次第
① 式典・昇殿参拝 12時
② 直会 13時30分
③ 式典・昇殿参拝(玉串料) 2000円
④ 参加費 5000円

皆様お誘い合わせの上、多数ご参加くださいますようお願い申し上げます。会員の皆様には、本誌同封の払込取扱票による参加費ご納入をもって、ご参加申込みにご替えさせていただきます。

会員以外の方は、当協議会事務局までお問い合わせください。
〒102-0073 千代田区九段北3-1-1

靖国神社遊就館内・地階
(公財)大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会事務局
電話 03-6380-8943
FAX 03-6380-8952
Eメール bck05197@nifty.com

は信時潔の作曲になる。いずれも名曲と言われているが、前者は勇壮・闊達、後者は莊重・優美な曲で、同窓生は皆これを誇りとし、今も愛唱している。その一節は次のとおりである。

「再興記念歌」

一 明治の天皇の聖旨にて

錦城城下樟蔭に

榮えし母校のあと慕ひ

皇紀二千六百年

ここ金剛の峰近く

再び聳てり我が武窓

「新校歌」

一 菊の御紋章

光榮に輝く千代田台

勅諭かしくみ朝夕な

御稜威を仰ぐ御垣守吾

戦後、GHQの占領政策によって、日本の教育内容を「客観的歴史と神話の分離」へと変革させられ、それに同調する津田左右吉博士らの「不合理な記述を含むものは信じられず、歴史を構成する資料としては、認めるべきではない」とする古代史観に洗脳され、日本の建国神話やナショナリズムを極端に避ける動きの中で、封印されてきた。この名曲が復活する切っ掛けとなったのは、平成27年2月11日の「建国記念の日奉祝中央式典」の第2部記念講演での、文芸評論家・都留文科大教授

授・新保祐司氏の「神武東征と交響曲『海道東征』の復活」と題する講演である。この名曲が、新保祐司氏によって発掘され、戦後70年の節目の年に蘇ることとなった。

そして、講演の最後に、新保氏の解説による『海道東征』の演奏録音の一部(第1章高千穂と第8章天業恢弘)が披露されたが、誠に格調高い演奏であつて、特に第8章天業恢弘は莊重、優雅にして歓喜溢れる感動的な曲趣であり、歳末によく演奏されるベートーベンの第九に勝るとも劣らない曲趣に、大いなる感銘を受けた。日本固有の、しかも日本建国の大業を歌い上げたこの曲こそ、第九に替えて、国民こそつて合唱するに相応しい曲であると同氏は強調された。同感である。なお、この名曲の概要は次のとおりである。

第1章 高千穂(たかちほ)

天地創造の場面から始まり、日向の国の高千穂の土地柄のよさが讃えられ、天照大御神の子孫であるカムヤマトイハレビコ(後の神武天皇)は、「我が国を統治するには、早く東へ向かわなければならぬ」と歌う。

第2章 大和思慕(やまとしほ)

出発前、まだ見ぬ大和の国を憧れうたう。『古事記』からの引用で「大

和は国のまほろば」という有名なフレーズが始まる。

第3章 御船出(みふなで)

日が昇り、カムヤマトイハレビコの顔が朱に染まる。ちょうど満ち潮になり、いよいよ船出。東征が始まる。

第4章 御船謡(みふなうた)

船出にあたり、旅の安全を祈願する。『祝詞』が引用されている。

第5章 速吸と菟狭(はやすいとうさ)

速吸は大分県と愛媛県間の佐賀関海峡、菟狭は大分県宇佐地方をさす。速吸の海峡での出来事をわらべうた風にうたい、菟狭に上陸した一行が歓待される様子を日本の中世歌謡風にうたう。

第6章 海道回顧(かいどうかいこ)

宇佐にしばらく滞在した後、筑紫の国、安芸の国、吉備の国を経てゆつくりと東を目指す。

第7章 白肩の津上陸(しらかたのつじょうりく)

一行は河内の国、白肩の津に上陸するが、長髓彦(ながすねひこ)の軍勢と戦闘になる。

第8章 天業恢弘(てんぎょうかいこう)

カムヤマトイハレビコは大和の橿原で即位して初代の天皇となる。三種の神器への賛歌がうたわれ、日本が建国される情景で結ばれる。

※北原白秋は、この『海道東征』を第

1部とし、続く第2部、第3部を信時潔と作る希望を持っていたが、果たさずに終わった。

信時潔没後50年となる平成27年11月20日(金)、信時の故郷・大阪、ザ・シンフォニーホールで、戦後初の交響曲『海道東征』全曲が演奏された。管弦楽は大阪フィルハーモニー交響楽団、指揮は北原幸男、合唱は大阪フィルハーモニー合唱団(ソプラノ幸田浩子・大田尚見、アルト山田愛子、テノール中鉢聡、バリトン田中純)と大阪すみよし少年少女合唱団である。

当日は、1700名の会場がチケット発売後半日で完売となる程の盛況であり、急速追加公演を行う程の人氣であった、という。翌平成28年秋にも大阪で再演され、大好評を博した。そこで、東京でも是非、という熱い期待に応えていよいよ来る平成29年4月19日(水)、池袋の東京芸術劇場コンサートホールで演奏されることとなった。

【管弦楽】東京フィルハーモニー交響楽団、【指揮】大井剛史、【ソプラノ】幸田浩子・盛田麻央、【アルト】田村由貴絵、【テノール】小原啓楼、【バリトン】原田圭、【合唱】栗友会(合唱指揮・栗山文昭・杉並児童合唱団(合唱指揮・津嶋麻子)である。

(飯田 正能記)

アリューシャン群島の戦いと慰霊

専務理事 圓藤 春喜

一 はじめに

今回は、アッツ島の玉砕、キスカ島の奇跡の撤退で知られるアリューシャン群島の戦いについて紹介する。

この作戦は、アリューシャン方面からの米軍の反攻阻止と米ソの連携を阻止する目的で、大東亜戦争の分水嶺となったミッドウェー作戦と同時に実施された作戦であり、米国本土で戦われた唯一の作戦で、日本軍が初めて玉砕した戦いでもあった。

以下、アッツ、キスカ両島の攻略からアッツ島玉砕・キスカ島撤退、戦後の慰霊について紹介する。

二 アリューシャン群島の地誌

アリューシャン群島は、図1のように米国のアラスカ半島からソ連(当時)のカムチャッカ半島にかけて弧状に連なる火山列島であり、長さは1930kmに達する。

西端の一部を除き米国の領土に属している。

北緯52〜55度に位置し、亜寒帯海洋

性気候に分類される。気温は、夏季で最高15度、最低8度、冬季で最高3度、最低マイナス2度である。

6〜7月にかけて濃霧が発生し、彼の作戦に重大な影響を及ぼした。

9月から風が強くなり、10〜12月にかけて暴風が吹き荒れるため、無木地帯が多い。降雪量は多くなく、作戦への影響は少ない。

アッツ・キスカの属する西部アリューシャン群島には、養孤業を営む住民と軍の通信施設に勤務する兵士が少数居住しているだけで軍の配兵はなかった。

アッツ島は、東西65km、南北35km、

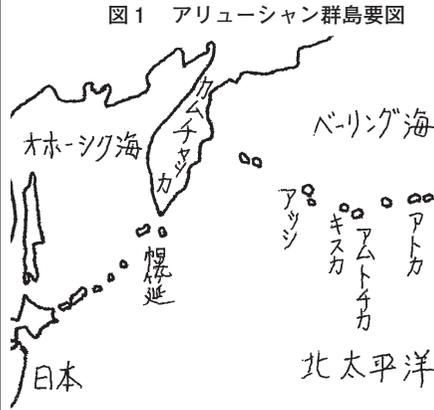


図1 アリューシャン群島要図

キスカ島は、東西40km、南北10kmの大きさで、両島とも山が海岸に迫り、平地は狭小であり、上陸適地は限定されるが、海軍基地に適した湾には恵まれていた。

三 アリューシャン群島攻略作戦

1 陸海軍の作戦準備

陸海軍は、昭和17年5月5日、「陸海軍協同して、主力をもってミッドウェー島を、一部をもってアリューシャン群島を攻略する」ことに決し、中央協定を締結し準備に着手した。協定の内容は次のとおり。

① 攻略部隊

海軍(指揮官・第5艦隊司令長官)

第5艦隊

第3戦隊(巡洋艦3)

第1水雷戦隊(巡洋艦1、駆逐艦7)

第4航空戦隊(軽空母2)

海軍特別陸戦隊1個大隊

支援第2戦隊(戦艦4)

陸軍(指揮官・穂積少佐)

北海支隊

独立歩兵第301大隊基幹

② 攻略方法

陸海軍協同し、まずアダック島を攻略し、軍事施設を破壊した後、海軍特別陸戦隊をもってキスカ島を、北海支

隊をもってアッツ島を攻略する(後日 アダック島攻略は削除)。

③ 攻略時期

6月上〜中旬に、ミッドウェー作戦と同時に実施

2 攻略部隊は、昭和17年5月23日大

湊に集結、諸準備の後26日に出港、6月4〜5日ダッチハーバー(アリューシャン列島東端の島の港町で、米空軍基地があった)を空母艦載機で空襲するが、悪天候と米空軍機の妨害で航空部隊撃破の目標は達成できなかつた。

6月5日にミッドウェー海戦があり、日本軍が大敗したことにより、アリューシャン作戦の実施の可否も検討されたが、予定どおり実施することに決し、海軍特別陸戦隊が6月7日夜キスカ島に、陸軍北海支隊が8日未明にアッツ島に奇襲上陸、抵抗を受けることなく両島を占領した。

攻略部隊は、気候条件の厳しさから冬季までに撤収予定であったが、攻略部隊の越冬可能との具申と米軍の日本本土爆撃基地設定阻止の必要性から、両島守備隊を大本営直轄とし、占領確保することとなった。

四 アッツ、キスカ両島の防衛

1 守備隊の配置変更と兵力増強

大本営は、米軍の反攻はアラスカに近いキスカ島、次いでアッツ島と判断し、昭和17年9月、アッツ島を占領していた北海支隊をキスカ島に移駐させ、キスカ島の防備を強化した。

米軍の反攻企図が明確になった10月下旬、大本営は北部軍司令官(北海道、樺太、千島の防衛担任)に対し、アリューシャン群島守備部隊の増強を命じた。北海支隊のキスカ移駐後配兵のなかったアッツ島には、10月30日と11月12日に北千島要塞歩兵隊主力が進出し、同島の確保に任じることとなった。

北部軍司令官は、北海守備隊(4個独立歩兵大隊基幹)を新編し、両島既配備の陸軍部隊を指揮下に入れるとともに増援に着手した。
北海守備隊の編成、任務は、次のとおり。

- 長・峯木少将、司令部キスカ島
- キスカ島守備隊・第1地区隊(長 佐藤政治大佐)
- 独立歩兵第301、第302大隊基幹
- キスカ島要域の確保
- アッツ島守備隊・第2地区隊(長 山崎保代大佐)
- 北千島要塞歩兵隊、独立歩兵第303大隊基幹

図2 キスカ島の配備

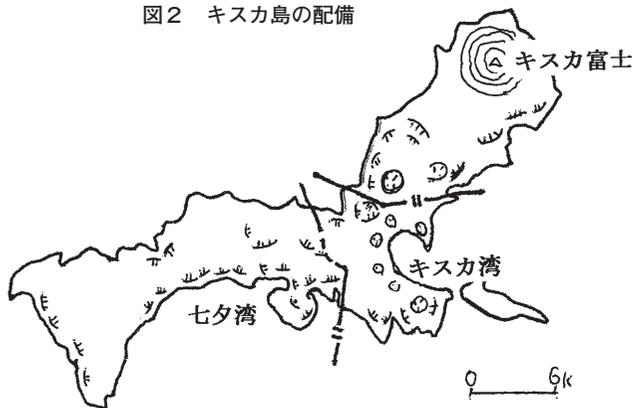
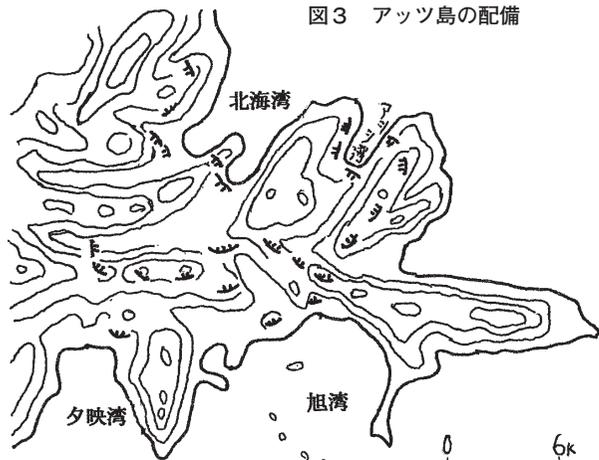


図3 アッツ島の配備



アッツ島要域の確保
陸海軍は、キスカ、アッツ両島の増強に努力し、1月末までに独立歩兵第303大隊、高射砲部隊、工兵部隊を上陸させた。

2月に入るとキスカ島への輸送がほぼ困難となり、陸軍部隊の配備の重点をアッツ島に変換した。
アッツ島への兵力増強はその後も継続し、3月10日には弾薬、糧秣、燃料、飛行場設定材料等の追送に成功するが、3月27日には、輸送船団を護衛す

る艦隊と増援を阻止しようとする米艦隊との間でアッツ島沖海戦が生起し、爾後の増援中止を余儀なくされた。

この輸送部隊に同行していた山崎大佐は、一旦幌筵島に引き返し、潜水艦に便乗して、4月18日にアッツ島に上陸した。

米軍上陸の5月上旬までに追送できなかったのは、予定の半分程度に止まった。

2 守備隊の防衛強化
① キスカ島守備隊
キスカ島では、海軍特別陸戦隊が飛行場の建設を担当、陸軍部隊(北海支

隊のみ)は陣地の構築に専念できたため、図2のような配備の堅固な陣地を構築することができた。

② アッツ島守備隊

昭和17年10月末にアッツ島に進出した北千島要塞歩兵隊と1月末に進出した独立歩兵第303大隊の約2650名は、図3のように米軍主力の上陸が予想される島南側の旭湾、夕映湾正面は、平坦で広正面となる水際配置を避け、主陣地を険峻な後方山岳に後退させて陣地を編成した。

陣地の構築は、主力を飛行場建設に充当せざるを得なかったため、築城工事が遅れ、露天掩体を交通壕で連接した程度の陣地で米軍の上陸を迎えることとなった。

五 米軍の反攻準備

ミッドウェー海戦に勝利した米軍は、昭和17年8月頃から反攻を準備し、8月末にはアダック島(キスカ島東方400km)に大飛行場(2000m×500m)を完成させ、9月中旬には戦爆連合航空部隊を推進し、日本軍守備隊に対する爆撃を強化するとともに艦艇部隊と連携して後方連絡線の遮断を企図した。

昭和18年2～3月には、カリ

フォルニアで使用予定の第7歩兵師団の上陸訓練を実施し、準備を推進した。

4月中旬以降は、砲爆撃を激化させ守備隊の戦力減殺を図った。

反攻計画は、「まず策源に近いキスカ島を占領、爾後アッツ島に進攻」の予定であったが、日本軍の配備の重点がキスカ島にあるとの判断から、3月3日に計画を変更し、「まずアッツ島を占領、爾後キスカ島に進攻する」となった。

米軍は、アッツ島の兵力・配備から3日でアッツ島を占領できると見ていたようである。

六 アッツ島の戦い

1 米軍の進攻

米第7師団は、5月7日の上陸を予定し来攻するが、悪天候のため延期し、天候の回復を待って12日上陸を開始、主力をもって島南側の旭湾（マカッサル湾）正面から、有力な一部をもって北側の北海湾（ホルツ湾）西側から進攻し、その日の内に橋頭堡を設定、爾後南北から守備隊を挟撃した。

2 守備隊の戦闘

アッツ島の戦況推移は、図4のとおりであり、守備隊は、険峻な地形を利用して激しく抵抗しつつ、18日には荒

井峠く將軍山く舌形台の線に後退した。

この戦況推移を確認した大本営は、奪還について海軍と協議するが、海軍の反対で奪還困難と判断し、5月18日「アッツ島放棄とキスカ守備隊の撤退」を決定した。

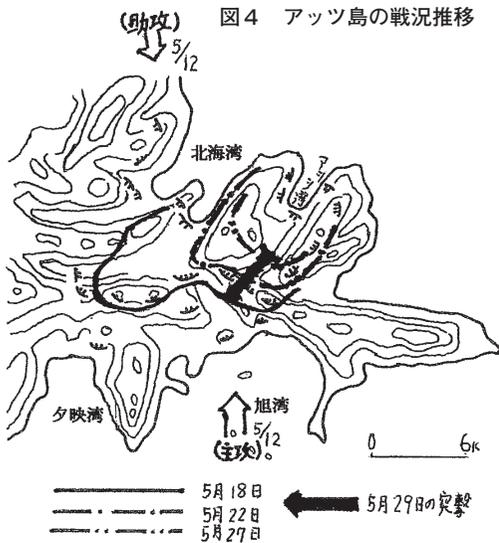
これに基づき北方軍司令官は、23日アッツ島守備隊に対し「(前略) 軍は海軍と共同し万策を尽くして人員の救出に務るも、地区隊長以下凡百の手段を講じて敵兵員の殲滅を図り、最後に至らば潔く玉碎し、皇国軍人精神の精華を發揮するの覚悟あらんことを望む」と打電し、守備隊が孤立無援最後

まで善戦し、日本武士道の精華を顕現することを要望した。

山崎大佐は、これに答えて「我軍は最後まで善戦奮闘し、国家永遠の生命を信じ、武士道に殉ずるであろう」と返電している。

守備隊は、22日頃には熱田湾周辺拠点に後退し抵抗を続けるが、28日には残存戦力が300名程度まで減少したため、山崎大佐は最後の突撃を敢行することに決し、29日大本営に訣別電報を打電した後、山崎部隊長を陣頭に突撃し、次々と米軍陣地を突破、米第7師団司令部付近まで肉薄したものの、遂に力尽き全員玉碎した。

図4 アッツ島の戦況推移



アッツ島の戦いの戦況推移は、図4のとおりである。大本営は、守備隊玉碎後も残存部隊救出のため潜水艦等を派遣するが、救出された人員はなかった。アッツ島の戦いにおける彼我の損耗は、下表のとおりである。

表 アッツ島の戦いにおける彼我の損耗

	守備隊	米軍
参加兵力	2,667	約 11,000
戦死者	2,638	約 600
戦傷者	0	約 1,200
その他	捕虜 29	

再検討の結果、この地方特有の濃霧を利用し、高速艦艇により一挙に撤退することに決し、第1水雷戦隊(司令官木村少将)を基幹とする収容艦隊(軽巡2、駆逐艦11)に準備を命じた。一方、陸軍部隊は、7月

七 キスカ島守備隊の撤退

1 キスカ島守備隊の撤退
キスカ島には、アッツ島の約2倍、5600余名の守備隊が配備されていた。

守備隊の撤収は、陸軍が艦艇による一挙撤退を要望するが、海軍の能力から、当初潜水艦による逐次撤退が採用され、13隻を投入して実施された。しかしながら、6月に実施された2回の作戦で収容されたのは患者、軍属を主体にした800名余に過ぎず、成果に比し、潜水艦の損耗が多く、6月23日に計画の中止を余儀なくされた。

3日に撤退命令を下達し準備に着手するが、中隊以下への下達は7日とし、部隊は陣地強化に努め、企図を秘匿した。

海軍収容艦隊は、7月7日幌筵島を出撃し、11日にはキスカ周辺に進出したが、濃霧が晴れ、その後の天候も不利な状況が続くと予想されたため、15日に行動を中止し、幌筵に帰投した。

収容艦隊は、キスカ周辺が再度濃霧に包まれるのを待ち、7月22日に幌筵を出撃、29日13時40分、敵の妨害を受けることなくキスカ湾に入泊、14時35分までの1時間弱で全島兵力約5200名の収容を終わり、7月31日(8月1日)にかけて幌筵に帰投し、収容作戦を完了した。

2 米軍の行動

米軍は、アッツ島より兵力も多く、堅固な陣地が構築されているキスカ島は、激しい抵抗があると判断し、周到に攻略準備を進めた。

① キスカ島の封鎖と戦力減殺

米軍は、6月にアッツ島とアッツ島の東20kmにあるシーミヤ島に航空基地を推進し、航空攻撃を強化するとともに、艦隊による砲撃を継続し、キスカ島の封鎖と守備隊の戦力減殺を図った。

② 米軍の上陸作戦

米軍は、7月29日の日本軍の撤退を察知できず、8月以降も猛烈な砲爆撃を反復した。

キスカ攻略部隊(兵力約3万4000名)は、計画どおり、8月13日にアッツ島を出発、14日朝、南西海岸に偽上陸をした後、島の西側海岸から上陸、15日朝までに陸兵7300名を上陸させ、日本軍の反撃に備えた。

17日以降、攻略部隊は濃霧の中前進を開始するが、全島占領までの間、友軍相撃が各地で発生し、多くの損害を出している。

八 戦後の慰霊

米軍は、昭和25年に山崎大佐が戦死された地点に記念碑を建立し、その善戦敢闘を称えている。

日本政府は、昭和32年にアッツ島守備隊が玉砕した地点に「北太平洋戦没者の碑」を建立し、戦没者を慰霊している。

また、アッツ・キスカの戦友遺族は、アッツ島玉砕雄魂之碑顕彰会を結成して拠金し、昭和43年7月29日に札幌護國神社境内に「アッツ島玉砕雄魂之碑」を建立し、戦没者を慰霊している。

アッツ・キスカ両島には、日本軍遺棄の兵器や輸送船の残骸、軍事施設の遺構が各所に点在しているが、アラス

カ国立海洋野生生物保護区とアメリカ合衆国歴史建造物に指定され、外来者に立ち入りが厳しく制限されている完全な無人島となっている。

九 結言

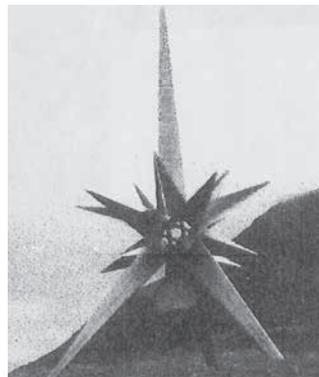
最後に、昭和39年に慰霊団がアッツ島を訪問した際、玉砕した兵士の遺品から見付け、雄魂之碑の由来に刻まれている和歌を紹介し、この稿を終えることとした。

短きを 何かなげかむ 君のため
御国のために 捨つる命は

アッツ島玉砕慰霊碑「雄魂の碑」



北太平洋戦没者の碑



ガダルカナル島撤退後の 中部ソロモン諸島の戦い

常務理事兼事務局長

岩田 司朗

はじめに

日本本土から小笠原諸島、内南洋諸島を経て南へ5000km、ニューギニア本島の東にビスマーク諸島、ソロモン諸島がある。

大東亜戦争開戦時、太平洋方面における日本海軍最大の根拠地である東カロリン諸島のトラック島を援護するため、ニューブリテン島のラバウルを占領することが計画され、昭和17年1月23日から実行された。続いて同年3月、海軍部隊は南海支隊と協同して、東部ニューギニア、ブーゲンビル島、ガダルカナル島、及びその北方フロリダ島のツラギを占領した。

昭和17年のこの頃、大本営は、対日反抗の一大拠点である豪州の孤立化を企図し、先ず米豪両国間の太平洋連絡路を遮断する目的で、フィジー、サモア、ニューカレドニアを占領すべく、第17軍を新たに編成し、作戦を準備した。

ところが、5月上旬の珊瑚海作戦、6月上旬のミッドウェー海戦の結果、海上勢力の均衡が破れて、この米豪遮

断作戦は中止となった。

一方、連合軍側は7月2日、南太平洋に対する本格的反攻計画を決定し、攻撃の第一の矢はソロモン諸島のガダルカナル島（以下「ガ島」という。）及びツラギに向けられた。

連合軍の本格的反攻を受けたツラギ基地の海軍部隊は壊滅し、滑走路の第一期工事を完成したばかりの「ガ島」飛行場設置隊は四散した。

「ガ島」飛行場を連合軍に奇襲占領された大本営は、同島奪回の方針の下に、一本支隊、川口支隊、第2師団等の増援が次々と発令された。

しかしながら、既に制海、制空権を喪失した「ガ島」の戦場で、飛行場奪回の目途なしと判断した大本営は、昭和18年1月4日、同島の兵力を後方要線に撤収する命令を発した。「ガ島」の第17軍諸部隊は、2月初旬までに北部ソロモンのブーゲンビル島に撤退した。

本稿では、「ガ島」撤退以後の中部ソロモン諸島における作戦・戦闘の様相を明らかにし、「戦没者遺骨収集推進法」に基づき、今、正に未帰還の遺骨の本邦帰還が図られようとしている折から、今も現地に残されている英霊の御遺骨に思いを致しながら、戦いの経過を記述する。

1 連合軍の基本戦略

昭和18年初めの南太平洋方面における連合軍の作戦方針は、次のようなものであった。

ハルゼー海軍大将の指揮する南太平洋方面部隊が、ソロモン諸島を経て、ブーゲンビル島へ北進する。マッカーサー陸軍大将の率いる南西太平洋方面部隊は、ニューギニアの北東海岸を前進してダンピール海峡を渡り、ニューブリテン島に上陸、更に日本軍のラバウルへの兵站線を遮断するために、ア

ドミラルティ諸島を攻略する。

そして、ラバウルが一度連合軍の陸、海、空三方面の作戦行動によって孤立したならば、この北進する両方面部隊はラバウルを目指して集中し、日本軍の大基地であるラバウル周辺地区を占領する、というものであった。

2 ソロモン方面の防衛態勢

「ガ島」撤退に伴うソロモン方面の防衛態勢強化のため、その防衛主線の決定について、陸海軍間に意見の対立を見たが、結局、双方の主張を折衷して、ニューギニア島及び

イサベル島以北を確保することとし、ニューギニア、イサベル両島の防衛は、海軍が担当し、北部ソロモン諸島（シオトランド島、ブーゲンビル島、ブカ島）は、陸軍が防衛を担当することで、南太平洋方面作戦陸海軍中央協定が決定された。

これに伴い、ガ島派遣の目的で編成された第八聯合特別陸戦隊は、昭和18年2月、中部ソロモン諸島に派遣され、第八艦隊司令長官の麾下に同方面の作戦に任



もこの方面の陸軍部隊の統括機関として、南東支隊が編成された。

(1) 八聯特の兵力配備の細部

重点をニュージョージア島ムンダ島基地南岸及び東岸とし、有力な一部を北岸(バイコロ港)付近に配置。また、一部の兵力(1個中隊ないし1個小队)をレンドバ、ビル、ウイクハム等の要地に派遣、極力これを確保、更に10名内外の兵力でエイガノ、ビスビス、ラマダに見張所を設置した。

コロバンガラ島(以下「コ島」という。)の兵力配備の重点は、コ島基地周辺、特に東岸及び南岸とし、見張所を同島中央山頂及び東、西、南、北の各正面に設置した。

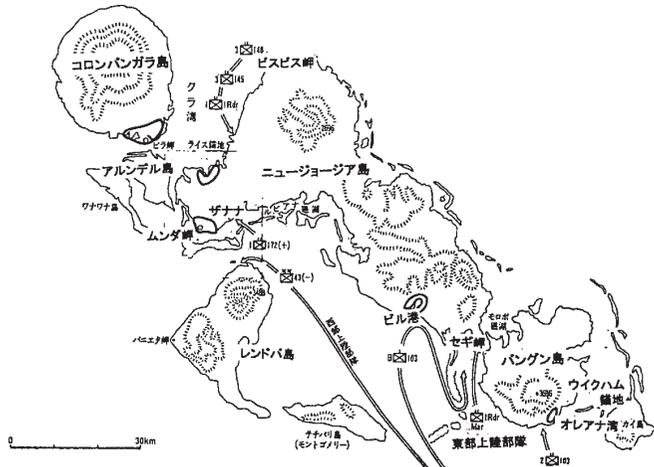
(2) 南東支隊の作戦準備

ソロモン方面海軍警備担任地域における陸軍部隊を指揮するため編成された南東支隊司令部(長・佐々木昇陸軍少将)は、5月26日、ブーゲンビル島エレベントにおいて編成を完結し、28日から31日にかけて、連合軍の爆撃を受けながらも、漸くコ島に達着、6月2日、ムンダに到着した。

司令部がムンダに進出した当時、陸海軍とも、主としてムンダ、コ島飛行場付近の海岸水際に、火炮、重火器の掩体を構築した程度、それも対艦射撃を主体とするものであった。

飛行場は、ムンダはほぼ完成、前進着陸場として使用でき、コロバンガラは概成程度で不時着陸場として使用できる状態であった。

南東支隊長は、ムンダ進出直後に策定した作戦計画に基づいて作戦準備を指導した。しかしながら、疾病による労力の減少、資材器具の不足、土質(リーフ)の不良、敵機の妨害等によって、計画どおりの進捗はできなかった。



3 レンドバ対上陸戦闘

6月30日午前4時42分(日出時)、灰色の海面に並んだ6隻の輸送船から数十隻の上陸用舟艇が、レンドバ北部海岸に向かって一斉に発進し、第一波は午前5時頃着岸した。

この時、日本軍守備隊(合計約140名)は緊急配備に付いたが、大勢は既に如何ともすることができなかった。約30分間の交戦で、逐次殺到する優勢な上陸部隊に対して、陸軍部隊は数人ずつ一団となり、格闘し戦死したと判断された。

海軍部隊の主力は、陣地の南側高地脚に兵力の集結を図った。

ムンダ基地では、海軍12糧、14糧砲は、情報に基づき直ちに射撃を開始し、米軍は軍艦の5吋砲で応戦した。この砲戦は、1日中続いた。

30日午前8時、南東支隊長と八聯特司令官の連名で、レンドバ防備部隊の撤収を命じた。

○ ビル方面の戦況

この方面に上陸した米軍は、東部上陸部隊の海兵隊第4襲撃大隊の主力で、6月27日夕から逐次上陸し、各所で軽戦を交えながら30日朝、ビル港東側地区に進出、日本軍の主陣地に接触した。

6月30日、7月1日の2日間、ビル港周辺で激しい攻防戦が展開され、日本軍は1日午後、61名の戦死者と約100名の負傷者を出して、ジャングル内を撤退した。

ビル部隊の行動の詳細は、不明であるが、7月19日の南東支隊司令部陣中日誌には、大隊長の指揮する陸海軍部隊人員170名がムンダに到着したとある。同隊の総員が少なくとも500名は超えると思われることから、約18日間のジャングル内退却行の厳しさを物語っている。

○ ウイクハム方面の戦闘

ウイクハムには海軍1個中隊、陸軍1個小隊が配備されていたが、6月30日、大発によりニュージョージア島北岸を経て撤退するよう無線命令が下達された以外に、公式資料はない。

ウイクハム守備隊付きの戦後の回想録によれば、守備隊長以下164名は、当陣地から脱出し、密林を越え、離島を伝ってニュージョージア島北岸地区を機動し、約70日間をかけて、コ島東岸に到着したという。ただし、この時の同行者は、海軍守備隊の小隊長以下わずか5名(内陸兵2名)であった。

4 ムンダ周辺の戦闘

(1) 連合軍の本島上陸
連合軍は、第43歩兵師団長全般指揮

の下、サザナ（日本名・鈴木浜）に上陸し、日本軍の積極的攻勢を受けずに、橋頭保を確保し、日本軍主陣地に対する攻撃を7月7日に開始する計画で、攻撃開始線バリケ河に向かい、逐次機動を開始した。

当時、日本側の兵力配備は、歩兵第229聯隊主力で、東面して西相川兩岸要地を占領、防空部隊主力がムンダ飛行場周辺、陸戦隊が海岸正面を警備していた。

米軍側の記録によれば、海岸に沿って前進した第172連隊は、順調にバリケ河の線に進出し得たが、右（北）翼の第169連隊は、同河上流で日本軍の機関銃射撃を受けて、7月5日から8日まで阻止された。この援護部隊の戦闘は、日本側の記録によれば、歩兵第229聯隊第11中隊が、4日間にわたって阻止したものである。

7月9日、攻撃開始線によりやく頭を揃えた米軍2個連隊は、前進を開始した。

まず午前7時、攻撃準備射撃が行われた。射撃時間は1時間、10榴2個大隊、15榴1個大隊で射撃合計5800発以上と記録されている。艦砲射撃は駆逐艦4隻、5吋砲弾2344発、近接航空支援は雷撃機52機、急降下爆撃機計88機で行われた。投下爆弾は約70

屯であった。

(2) 陣前出撃

南東支隊は、鈴木浜に連合軍が上陸したことが確実となると、断固この敵を攻撃することを決意した。

コ島よりパイロコに上陸した歩兵第13聯隊長（友成敏大佐）の指揮する2個大隊約1300名は、「上陸セル敵主力ノ側背ヲ求メテ攻撃シ之ヲ海岸ニ圧迫シ撃滅スベシ」との新たな命令に基づき、聯隊は機動を開始した。

14日早朝、約1個大隊が農園付近を出発、先頭は、午前10時、相川上流渡河点に到達し、兵力を集結、敵情地形を偵察し、爾後の攻撃を準備した。銃声さえも密林に覆われて至近距離以外は聞こえないジャングルの中を、山を越え、谷を渡ることを繰り返して、鈴木浜を目指して進んだ。

午後6時、2個大隊を並列して攻撃を開始し、折からのスコールに乗じて榴弾を投げながら敵陣に突入した。この攻撃で第43師団司令部を包囲し、ザナナ海岸の西方400ヤードの地点に進出し、前線と後方を連ねる補給線を遮断したが、夜が明けると米軍砲兵の猛烈な射撃が始まり、聯隊長は再度の攻撃を断念し、弾幕地帯の外の密林に退避した。

(3) 主陣地占領部隊の戦闘

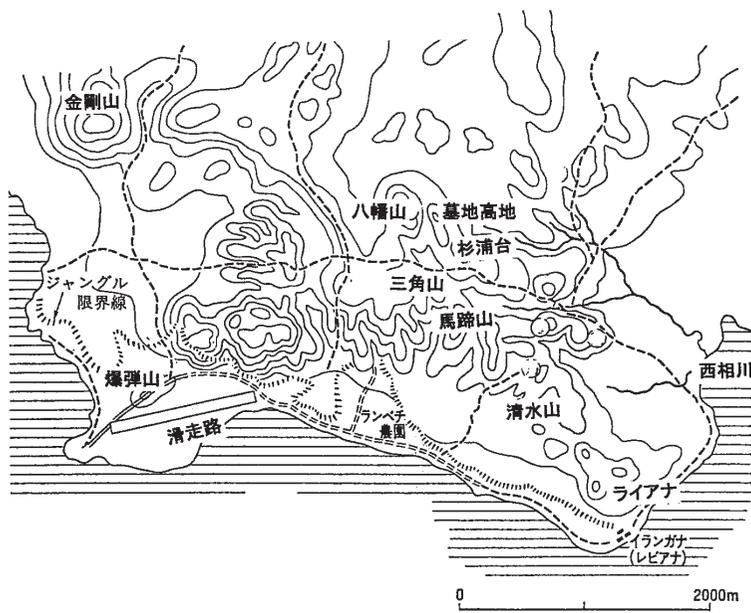
ムンダ地区には、南東支隊の主力である第229聯隊が、本部を馬蹄山に配置し、第3大隊を基幹として墓地高地―杉浦台―清水山―ルビアナ村に主陣地を占領し、米軍の進攻に備えていた。

本正面には、鈴木浜に上陸、進攻した米第43師団が、7月9日、主陣地にて、攻撃準備射撃及び近接航空支援

の下、8時30分、2個連隊を並列して攻撃を開始しようとしたが、どの部隊も攻撃開始線に到達していなかった。10日から13日にかけて、猛烈な砲爆撃支援の下に、歩兵連隊による攻撃が行われたが、一進一退の攻防が続いた。

伸び切った後方補給線を短縮するため、米南翼第172連隊が陸路南進して、ライアナに新橋頭保を準備し、14日朝、第103歩兵連隊第3大隊と海兵隊戦車小隊が上陸用舟艇に乗り、レンドバからライアナに上陸した。この上陸戦闘を巡っては、米軍と日本軍の戦果の記録は、真つ逆さになっており、真相を判明し得る資料はない。

17日までの戦闘では、日本軍の抵抗により、攻撃が進捗しないばかりでなく、戦死約90名、負傷630名に加えて、1000名以上の



者が「戦争ノイローゼ」と診断され、戦線を離れていった。

ニュージョージアに進出し、現地の状況を把握した第14軍団司令官は、「第43師団だけではムンダ占領は不可能である」として、16日には第25師団及び第37師団の残部を戦線に投入することが決定された。

5 バイロコ周辺の戦闘

クラ湾を差し挟んでコ島に面する裏ムンダ海岸の日本軍防衛担任は、呉鎮守府第6特別陸戦隊であったが、この陸戦隊は他地区にも戦力を派遣していたため、バイロコ周辺には、陸戦隊本部を基幹とする約1個中隊の兵力しかなかった。

連合軍は、7月4日午後10時35分から艦砲射撃の援護下に、ライス錨地上陸した。ライス湾から南下して大きく迂回し、エノガイ岬に向かって機動中の米軍と、日本軍守備部隊との最初の接触は、7月7日エノガイ入江の西岸で起きた。米軍は8日からエノガイに対する攻撃を続行、10日には衆寡敵せず、海軍側81名、陸軍1個小隊から成るエノガイ守備隊は玉砕した。米側の損害は、戦死47名、行方不明4名、負傷74名に達し、戦力が回復するまで攻撃を延期せざるを得なかった。

米軍の攻撃行動は、20日午前8時か

ら再興されたが、調整が間に合わず、大規模な艦砲射撃も航空支援も行われない状況での攻撃となり、コ島から兵力を転用して警備を強化した日本軍陣地は、簡単に抜けるものではなく、20日終日の戦闘も死傷が増加するだけで、海兵大隊のこの日の損害は、戦死64名、負傷161名で、後退を決心せざるを得なかった。

6 7月下旬の戦闘

(1) ムンダ主陣地前方の戦闘
7月19日から24日までは、定型と化した終日にわたる重砲の射撃、数十機の編隊爆撃が反復して行われたが、地上第一線の陣地に変化はなかった。この間、先に鈴木浜の敵を攻撃した後、集結中の歩兵第13聯隊に対し、南東支隊長は、支隊参謀を相川上流に派遣し、次の支隊命令を、友成聯隊長に渡し、直接伝達した。

「歩兵第13聯隊長ハ23日払曉ヨリ歩兵第229聯隊第3大隊正面(馬蹄山附近)ノ敵右翼ヲ求メテ攻撃シ相川渡河点ニ通ズル道路ノ線ニ進出スベシ」
一方、米第14軍団は、「7月25日早朝、2個師団を並列して、重点を右(北)に保持しつつ攻撃開始、日本軍をムンダ西方海岸に圧倒撃滅する。」方針の下に攻撃開始線から前進を開始した。

7月25日から8月1日にかけて、日

本軍第13聯隊と米軍第37師団第148連隊(右第一線連隊)との激戦が展開された。米第148連隊は、日本軍の猛攻に前進も後退もかなわず、8月1日午前8時50分、着剣して射撃と連動による最後の突撃により、日本軍の包囲を突破して、隣接連隊の正面によりやく到達した。

(2) ムンダ主陣地の戦闘

米軍の攻撃開始は、7月25日。軍団の攻撃重点は、並列する北側師団に指向されていた。7月31日まで、連日連夜死闘が繰り返されたが、日本側の記録は極めて少ない。

主陣地の兵力配備は、歩兵第229聯隊主力が東面とし、西相川から馬蹄山、三角山を核心として陣地を占領、防空部隊がムンダ飛行場周辺、陸戦隊が海岸正面を警備していた。

約1ヵ月にわたる米軍の砲爆撃と、各陣地の戦闘の結果、29日頃の聯隊の戦力は、既にその3分の1にも満たないものになっていた。

米軍公刊戦史によれば、当時の戦闘状況を次のように記録している。

「隠れ場所から飛び出してきた日本兵が、戦車につかるようにして、エンジン室の側面に装甲爆雷を載せた。爆雷の破裂と、37耗砲弾が日本兵に当たるのと同時だった。

戦友の壮烈な戦いにめげず、別の日本兵が同じ戦車の傍らに飛び込んだ。エンジン室の扉に、他の装甲爆雷を固定した。彼も銃弾に斃れたが、次の瞬間、爆雷が破裂し、戦車は、濃い白い煙に包まれた。」

7月31日、歩兵第229聯隊は既に中隊が4〜5名となったところも出てきた。午後5時、支隊長は、「支隊は爆弾山附近―三角山―八幡山の線において態勢を整理し、機を見て敵を反撃する。」方針の下、一部戦線を整理する決心をした。

7 ムンダ地区新陣地の戦闘指揮

第一線諸部隊は、新陣地占領に関する命令に基づき、7月31日夜半から撤退を開始した。米軍の追撃は極めて緩慢で、部隊の移動はおおむね整齐と実施され、8月1日払曉までに新配備を完了した。

2日未明から飛行場地区では、米軍の猛攻を受け、午後には中、小隊長が倒れ、中隊は軍曹が数十名を指揮して抵抗するといった状態になった。更に米軍徒歩部隊は、益々増加して、忽ち大隊が包囲されるに至った。

敵の弾圧下で後方要線に態勢を整理することは容易なことではない。3日朝からの米軍の浸透に対し、対策が間に合わず、支隊司令部、聯隊本部は全

く分断されるに至った。前線部隊の自

動火器は殆ど全滅し、白兵を振るって
戦闘をしている。金剛山の支隊司令部
と爆弾山の第一線との連携は、全く途
絶え、5日午前8時、7月初旬以来約

1ヵ月間努力に努力を重ねたムンダ基
地の直接守備隊構想を放棄し、新態勢
に移行する準備命令を出さざるを得な
くなった。即ち歩兵第13聯隊はコ島転

進、歩兵第23聯隊第3大隊はバンガ島
守備、八聯特はアルンデル島南部の警
備強化、歩兵第229聯隊は呉六特農
園南東約2キロの高地線を占領、主と

してムンダ方向、相川上流方向からす
る米軍の攻撃の破砕を骨子とする命令
を下した。

8 バンガ島の戦闘

バンガ島南端に14日、米軍が上陸、
この敵に対し、歩兵第23聯隊第3大隊
は主力を挙げて14日夕方から15日払暁
にかけて夜襲を決行した。その後、16

日、18日にかけて米軍は兵力を増強し
陣地の間隙に侵入してきた。

南東支隊長は20日、「アンデル島で
事後の抵抗を策す」方針を決定、同地
守備部隊主力は、21日夜撤退した。

米側の記録によれば、攻撃に任じた
部隊の損害は、戦死52名、戦傷110名、
戦闘以外の死傷486名であった。

9 アルンデル島の戦闘

コ島の基地地区隊（歩兵第13聯隊）
が新たな任務を受けて8月24日、第1
中隊、次いで第1大隊主力がアンデル
島に前進した。

8月27日、米軍が同島に侵攻を開
始、日本軍守備部隊の猛烈果敢な戦闘
に米軍は、新たな戦力を次々と増強し
た。支隊全力でアンデル島に攻勢を取

るため、9月13日、第13聯隊主力が同
島に進出したが、聯隊長、第3大隊長
が戦死するという激戦を経て、19日か
ら21日にかけて、聯隊はコ島への撤退
を完了した。

10 南東支隊の撤退

8月10日以来、農園付近に対する米
軍の圧迫が強化された。南東支隊長
は、補給の見込みがないことを重視
し、15日、全般の状況からコ島重視案
を採用し、指揮下部隊にコ島防衛態勢
への移行を命じた。

一方、大本営は、この緊急事態に即
応するため、8月13日、「概ね9月下
旬乃至10月上旬間ノ適時中部『ソロモ
ン』群島方面ノ部隊ハ後方要地ニ転用
スルニ務ム」を骨子とする指示を発令
した。

9月20日、「大発機動ニ依リ二次ニ
亘リ先ヅ「チ島」ニ前進シ爾後状況ニ依
リ陸路或ハ海路逐次「ボ」島ニ転進ス」

	戦没者数	収容遺骨数
ニュージョージア島	1,600	221
コロバンガラ島	2,500	25

を方針とする転
進計画が下達さ
れた。

第一次撤退

・人員七、七六二

第二次撤退

・人員四、七七三

の撤退作戦が9

月23日から10月

2日にかけて遂
行された。

コ島撤退作戦

の舟艇機動間に

受けた攻撃回数

は、巡用艦8、駆逐艦36に上った。沈

没舟艇数は約半数に達したが、幸運に

も転進部隊を搭載していた舟艇は1隻

だけであった。そして転進部隊の戦死

者数約200名に対し、その輸送に任

じた機動舟艇部隊側の戦死者が170

名を数えるに至った。

また、ベラベラ島守備隊589名
全員の撤退作戦も10月7日朝完了し
た。

南東支隊は、10月5日、ブーゲンビ
ル島ブインにおいて編組が解かれた。

11 中部ソロモン諸島における遺骨収容の状況

本稿対象の中部ソロモン諸島におけ
る遺骨収容の状況は、上表のとおりで

ある（厚生労働省平成28年9月現在）。
ビスマーク・ソロモン諸島全域では、
約4万2000名についての詳細な戦
没地域が不明であることから、より綿
密な情報の収集と、これに基づく遺骨
収容帰還事業の推進が望まれる。

高砂義勇隊の活躍

陸士61期 飯田 正能

大東亜戦争の緒戦において、南方戦
線で、日本兵として勇猛果敢に戦った
台湾先住民・高砂族出身者の部隊が
あった。開戦後、台湾でも特別志願制
度が実施されると、高砂族からも5千
人に上る若者が志願した。その中から
選抜された500名の部隊が、前線で
戦う兵士を支援する「軍属」として結
成され、昭和17年初頭、台湾を出発し
た。これが、高砂族の青年たちで編成
された「高砂挺身報国隊（第一次高砂
義勇隊）」である。

部隊は、3月27日にフィリピン・リ
ンガエン湾に上陸、バターン半島・コ
レヒドール島の攻略戦に投入され、
100日を超える激戦の末、友軍に勝
利をもたらす大活躍を見せた。これ以
後数次にわたり派遣され、フィリピ

ン、ボルネオ、ニューギニアなどの南方戦線で、ジャングルでの活動に慣れていた高砂族はゲリラ戦を展開する専門部隊として奮戦を続け、捨て身の斬り込みなど、特攻に等しい攻撃も敢行し、友軍から厚い信頼を寄せられるに至った。体力に富み、敏捷で、戦友への思い遣りも深かった。先住民伝統の「蕃刀」を振るって山道を切り開き、敵の接近をいち早く察知し、木の枝ぶりを見るだけで南北の方向を見極め、味方を誘導するなど、日本兵に勝るとも劣らぬ働きを示した。

明治28(1895)年、日清戦争に

勝利し、同年4月17日調印された講和条約(下関条約)によって清国から台湾を割譲された日本は、統治のために台湾総督府を置き、森林資源に富んだ山岳地帯の開発に着手した。その山岳地帯に暮らしていたのが、タイヤル族・アミ族・ツォウ族など、部落ごとに言葉や風習の異なった先住民たちである。清国からは野蛮な民族と見なされ、「生蕃」、「蕃人」と呼ばれていたが、日本は彼らを総称して、「高砂族」と呼んだ。部族間で互いに争い、首狩りの風習も持っていた彼らを何とかまとめ、本土の日本人と同様な近代国家の国民に育てようとした。

昭和5(1930)年10月27日に、

台中州能高郡霧社(現在の南投県仁愛郷)で日本人警察官とタイヤル族の若者との間に起きた諍いがもとで、約300人のタイヤル族の男たちが日本人を襲い、130人以上を殺害した。総督府も軍隊を派遣して蜂起を鎮

圧し、タイヤル族には1千人以上の死者が出た。この「霧社事件」が契機となり、以後、総督府は台湾統治の方針を大きく見直し、高砂族も等しく天皇の赤子であるとし、農業指導員を派遣して水田を整備し、医療や教育の一層の充実にも努め、高砂族の生活水準の向上と融和を図った。

その結果が、高砂義勇隊を生んだ大きな成果となって現れたのである。同時に、日本人農業・土木技師八田與一氏が、10年の歳月と5400万円の予算を注ぎ込んで、昭和5(1930)年旧台南州嘉南に、当時東洋一の灌漑土木工事と言われた灌漑用ダム「嘉南大圳」を完成させ、当時不毛の大地と言われた嘉南平野15万町歩を台湾最大の穀倉地帯に変え、今なお、「嘉南大圳の父」として60万の農民から篤い感謝と尊敬の念を払われている事実と軌を一にするものである。

敗戦後、日本は台湾の統治権を失い、日本人たちは本土へ帰ったが、タイヤル族の故地・烏来(台湾北部の新

北市)に建つ「高砂義勇隊慰霊碑」の維持・管理に、今も感謝を込めて支援を続けている。

協議会参加団体の紹介

○ 埼玉偕行会―活動状況―

埼玉偕行会事務局長 小林 武一
1 沿革

埼玉偕行会は、今を去る64年前の昭和28年、石川愛中將(陸軍士官学校27期)を中心に埼玉県在住の有志数十名の会員をもって発足し、逐次発展拡充してきた。

その後、一時中断の時期を経て、昭和52年に再建され、同61年には、元宮様竹田恒徳偕行社長御臨席の下、10周年記念行事が盛大に行われた。その前年には、現在発行している「埼玉偕行会だより」の前身であり、平成17年まで続いた「埼玉偕行会会報第1号」が刊行されている。

平成19年から、逐次、元幹部自衛官(以下「元自」という。)の本会参入を経て、平成28年11月現在の会員数は総勢529名、うち元自会員は373名となっている。

2 偕行社との関係

埼玉偕行会は、埼玉県内に在住又は職場を有する旧陸軍の将校養成学校出身者(終戦時の在校者を含む。)及び元自会員、賛助会員、家族会員等を基本会員とする任意団体であり、偕行社(公益財団法人)の支部組織ではない。しかし、埼玉偕行会は目的・活動・会員等において、偕行社と密接な共通連携関係にあり、首都に隣接する地域的特色を踏まえつつ、偕行社と連携し、旧軍の良き伝統を継承発展させる役割がある。

偕行社と各地偕行会との一体化施策の下、平成28年度には埼玉県在住の元自会員で埼玉偕行会には入会していない偕行社会員も埼玉偕行会の会員とすることになった。

3 組織継承の経緯

埼玉偕行会は、平成18年11月の理事会において、「元自会員の入会を促進し、後継者として会の存続発展を期す。」ことを決議し、「元自会員の入会が促進されることとなった。

旧陸軍関係会員(以下「旧軍会員」という。)の老齢化と元自会員の入会者数の増加につれて、組織の運営を逐次、旧軍会員から元自会員へ移行が進められてきた。

平成21年度に、元自会員から副会長

及び理事が選任され、次いで23年度に事務局長、26年度には会長にそれぞれ元自会員が選任され、逐次、会の運営は元自会員が主体となつてきている。

4 会の運営機関等

平成28年度の運営組織としては、名誉会長に樋口太氏（陸幼48）、会長に齊藤信氏（元自61）、副会長には三浦天士氏（元自69）、柳沢寿昭氏（元自69）の2名、事務局長に小林武一（元自64）及び理事には旧軍会員10名、元自会員24名計34名、並びに監事としては旧軍会員田村正夫氏（陸士60）、佐藤義雄氏（陸士61）の2名で組織されている。会議は年に1回の総会、議事の決定機関である理事会は年に3回、それぞれの準備会議である常務理事会も年に3、4回実施している。

5 慰霊顕彰の状況

(1) 慰霊祭等への参加
都、県内で執り行われる慰霊祭等には、殆ど全ての行事に会長又は代理や有志が参加している。

靖国神社

- ・春、秋例大祭・みたま祭り
- ・大東亜戦争全戦没者慰霊祭
- ・特攻隊合同慰霊祭
- 世田谷山観音寺
- ・特攻平和観音年次法要
- 千鳥ヶ淵戦没者墓苑

・秋季慰霊祭

○市ヶ谷台

・慰霊祭

○埼玉縣護國神社

・例祭

・みたま祭り

・埼玉県特攻慰霊祭

・正式参拝

毎年6月、埼玉偕行会の行事として、埼玉縣護國神社で実施する常務理事会の開始前に正式参拝を実施している。

○朝霞駐屯地

・埼玉県殉職隊員追悼式

○朝霞駐屯地

・埼玉県殉職隊員追悼式

(2) 「特攻勇士之像」建立・奉納

平成24年7月、埼玉偕行会が主体となり、建設委員会（会長・埼玉縣護國神社崇敬奉賛会会長関根則之氏）を設立し、募金活動、建設業務を推進し、平成25年10月、埼玉縣護國神社に全国13番目となる「埼玉県特攻勇士之像」を建立、残余金と共に無事奉納した。

○朝霞駐屯地

・東部方面隊創立記念行事

・体育学校創立記念行事

・賀詞交歓会

・観桜会

・納涼大会

○大宮駐屯地

・創立記念行事

・夏祭り

○その他

・建国奉祝祭（寶登山神社）

・埼玉県英霊にこたえる会総会

・靖国神社崇敬奉賛会定例総会

○友誼団体等との交流

(1) NPO法人国民保護協力会

総会、及び山下奉文大将慰霊祭に毎年、埼玉偕行会から十数名が参加している。

(2) 隊友会

県の隊友会総会に会長以下有志が参加するとともに、隊友会人間地区支部協議会の主催する防衛講座に協力、毎回30数名が参加している。

8 会員の研鑽・親睦

(1) 記念講演

例年総会時に、会員の見識向上を目的に、時局にあった演題を選定し、適任の講師に依頼して、記念講演を実施している。最近実施した講演は次のとおりである。

ア 平成26年度

講師 帝京大学教授 志方俊之氏

演題 「大丈夫か、我が国の防衛体制」

イ 平成27年度

講師 朝霞駐屯地司令

講師 陸将補 岩谷 要氏

演題 「最近の内情勢について
—陸上自衛隊の将来態勢・体制の方向—」

ウ 平成28年度

講師 偕行社副理事長 富澤暉氏

演題 「防衛問題あれこれ—新安保体制、米国戦略の揺らぎ、そして憲法問題—」

(2) 偕行社主催の講演等への参加

偕行社で毎月実施している安全保障講座や近現代史研究会講座に参加するとともに、特に例年2月に実施される近現代史シンポジウム、及び3月に実施される安全保障シンポジウムにはできるだけ多くの会員が参加するよう奨

観桜会、各種行事に全面的に協力、及び参加している。特筆すべきは、振武台の観桜会の席に例年、東部方面総監始め幕僚長、総監部の部課長のほぼ全員が参会して先輩との交流を楽しんでいる。

なお、近い将来、振武台連絡会の事業を、埼玉偕行会が引き継ぐことが決定されている。

また、振武臺記念館は、総監部と偕行社との協定に基づき、広報センターの管理下で、平成27年4月から一般に公開されている。

また、振武臺記念館は、総監部と偕行社との協定に基づき、広報センターの管理下で、平成27年4月から一般に公開されている。

励している。

(3) 機関誌の発行・送付

ア 「埼玉偕行会だより」

平成17年8月1日をもって最終号となった「埼玉偕行会会報」の後を受け、翌々年の19年12月から会の情報誌として年1回「埼玉偕行会だより」を発行している。爾来平成28年12月には第10号を数えることとなった。

年間の活動状況をA判用紙8ページに要約・編集し、例年12月に発行している。内容的には、会長挨拶、年度の総会報告、会員の動向、主要活動状況等、最後に目玉として、総会時の記念講演の要旨を掲載している。

イ 「会員の近況・意見集」

事前に投稿を依頼し、これらを編集して、例年4月に発行している。

内容的には、ほんの一行「元気でやっております。」等から5〜6百字くらいの小論文風の意見まで多種多様であり、お互いの近況を知らせ合ったり、国内外情勢に応じた意見の交換等好評を博している。

(4) 会員相互の親睦

ア 小会合等

総会時の懇親会、理事会後の軽い懇親会、各駐屯地の納涼祭、観桜会

等のほか、近傍地域会員の融和団結を図るブロックごとの「小会合」を実施している。

イ 歌唱会

埼玉偕行歌唱会は、例年偶数月に、年6回、最近では和光市のシダックスで実施している。各自歌唱力を披露し、結びには全員で軍歌数曲を合唱し、浩然の気を養う良き交流の場となっている。

この会は、平成8年頃開始され、平成29年2月に第118回を迎えた。

ウ 「ゆつくり歩こう会」

10年くらい前から旧軍会員の陸士60期生を中心に、有志で年に6〜10回、名所旧跡を訪ね、英気を養っている。歩く地域は関東周辺で、交代で2人の担当を決め、市販の散歩コース本を参考に下見を実施した上で、毎回6〜10名程度で楽しい一時を過ごしている。

9 今後の課題

現在正に伝統継承の過渡期である。これを完成するのは元自会員による会員の増勢が必須である。

偕行社の平成29年3月時点の入会目標3千名がほぼ達成された。今後は5千名が目標である。偕行社の入会促進委員長の言葉を借りれば「今後は各

会員が一人の目標を達成すれば、5千人体制は早期に確立できる。」とある。埼玉偕行会も、偕行社と連携して5千人体制に向かって邁進したい。

事務局からの報告等

一 理事会の開催

3月1日(水)、平成28年度第2回通常理事会が、当協議会会議室において開催された。

会議においては、事務局からの提出議題について、熱心な討議が行われ、いずれも事務局案が、原案どおり承認された。

1 議案

① 平成29年度事業計画書及び同収支予算書

② 財産運用の執行方針及び計画

③ 平成28年度決算における基本財産の帳簿価格

④ 平成28年度下半期業務執行状況

2 出席者

理事11名中11名、及び監事2名が出席した。

二 評議員会の開催

3月17日(金)、平成28年度臨時評

議員会が靖国会館玉垣の間において開催された。

会議においては、事務局からの提出議題について、熱心な討議が行われ、いずれも事務局案が、原案どおり承認された。

1 議案

① 平成29年度事業計画書及び同収支予算書

② 財産運用の執行方針及び計画

③ 平成28年度決算における基本財産の帳簿価格

2 出席者

評議員13名中11名が出席した。

三 慰霊祭等への参加状況

1 平成29年2月2日、千鳥ヶ淵戦没者墓苑において、硫黄島戦没者遺骨帰還団の遺骨引渡式が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事外1名が参列した。

2 平成29年2月23日、(公財)青葉園において、NPO法人国民保護協力会主催による山下奉文大将閣下慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤春喜専務理事外1名が参列した。

3 平成29年3月5日、靖國神社において、NPO法人JYMA日本青年遺骨収集団主催による戦没者慰霊祭が執り行われ、当協議会から岩田司

朗常務理事が参列した。

4 平成29年3月25日、靖國神社において、(公財)特攻隊戦没者慰霊顕彰会主催による第38回特攻隊全戦没者慰霊祭が執り行われ、当協議会から圓藤専務理事が参列した。

三 硫黄島遺骨帰還通常派遣事業への参画

平成28年度第4回派遣が、平成29年1月18日から2月1日まで実施され、当協議会からの派遣団員として、(公財)偕行社及び(公財)水交会から各1名が参加し、御遺骨の収容に献身されました。

収容作業は、気温摂氏60度以上の高温多湿、狭い洞窟内で行われ、体力の消耗が著しく、大変御苦労されました。お疲れ様でした。

新入会員名簿 (敬称略)

(平成28年12月1日～平成29年2月28日)

【正会員】

ネービー21

(会長 上杉 公仁)

【賛助会員】

品川 隆

会費納入のお願い

会費納入のお願い

平成29年度の年会費納入にご協力をお願い申し上げます。

なお、本会報同封の払込取扱票は、賛助会員年会費納入並びに平成29年度合同慰霊祭参加申込み及び参加費納入を兼ねておりますので、ご確認の上、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

ご寄稿についてのお願い

当協議会では、広報誌「慰霊」を、年4回(一月、四月、七月、十月)発行しています。各団体及び会員の皆様の積極的なご寄稿をお願い申し上げます。

ご寄稿に際しましては、次の点にご留意くださるようお願いいたします。

- 1 原稿は、手書き、ワープロ・パソコン作成のいずれでも結構ですが、なるべく縦書き、1段17字詰めをお願いします。
- 2 記事の取捨選択、紙面の都合等による一部割愛、修文等については、当協議会事務局にお願いします。
- 3 慰霊祭、行事等の写真がありましたら、なるべく添付してください。
- 4 原稿、写真等は、原則としてお返しいたしませんが必要な場合は、その旨お書き添えください。
- 5 会報・機関誌、投稿記事等の送付先は、左記の当協議会事務局宛とさせていただきます。

記

〒102-10073

東京都千代田区九段北3-1-11

靖國神社遊就館内・地階

(公財)大東亜戦争全戦没者

慰霊団体協議会事務局

電話 03-63380189

FAX 03-63380189

当協議会会員ご入会のご案内

当協議会は、心ある皆様の浄財によって運営されています。戦没者慰霊事業の永続を希う多く皆様の、当協議会会員ご加入を、心からお待ち申し上げます。

皆様のご協力をお願いいたします。

会員の区分と年会費は次のとおりです。

一 賛助会員

(本会の趣旨に賛同する個人)

年会費 三〇〇〇円

二 賛助特別会員

(特別ご芳志の賛助会員)

年会費 五〇〇〇円

三 正会員

(本会の趣旨に賛同する慰霊目的の法人・団体)

年会費 一〇〇〇〇円

四 特別会員

(本会の趣旨に賛同する法人・団体)

年会費 一口一〇〇〇〇円

(一口以上)

協議会参加各団体の平成29年度慰霊行事予定 (情報入手分のみ)

(各団体が主催する慰霊行事を主とし、協賛行事は割愛しています。)

(年月日)	(時間)	(慰霊行事名)	(場所)
29・7・8	式典12時 直会13時30分	(公財) 大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会 平成29年度大東亜戦争 全戦没者合同慰霊祭	靖国神社 靖国会館
29・5・28	10時30分	(公財) 海原会 第50回予科練戦没者 慰霊祭	陸自武器学校内・ 雄翔園二人像前
29・4・1	14時45分	英霊にこたえる会 第33回靖国神社の桜の花の 下で「同期の桜」を歌う会	靖国神社大村
29・8・15	9時	第42回全国戦没者慰霊大祭	益次郎像前 靖国神社
29・8・15	9時	第31回戦没者追悼中央国民 集会(共催・日本会議)	靖国神社境内
29・6・18	9時30分	鹿兒島県沖繩戦没者慰霊祭	鹿兒島県護國神社
29・8・15	10時	大東亜戦争戦没者慰霊祭	鹿兒島縣護國神社
29・3・26	10時	鹿兒島戦没者墓地慰霊祭	鹿兒島戦没者墓地
29・4・1	14時45分	旧戦友連 第33回靖国神社の桜の花の 下で「同期の桜」を歌う会	靖国神社大村
29・4・29	11時30分	通年(日曜日、祭日) 10時	靖国神社大村
29・9・14	14時	昭和殉難法務死者追悼・ 年次法要(共催)	高野山奥の院 京都靈山護國神社
29・11・1	11時	熊本県偕行会 合同慰霊祭	熊本縣護國神社
29・2・23	11時	特定非営利活動法人国民保護協力会 山下奉文大将慰霊祭	青葉園
29・3・3	11時	特定非営利活動法人JYMA JYMA慰霊祭・活動報告会	靖国神社
29・10・22	11時	全国ソロモン会 ソロモン群島方面戦没者慰霊祭	靖国神社
29・4・7	11時	全国メレヨン会 第48回全国メレヨン島戦没者追悼 慰霊祭	備後護國神社慰霊碑前
29・6・4	11時	メレヨン島北海道出身戦没者追悼 慰霊祭	札幌護國神社慰霊碑前
29・10・29	11時	全ビルマ会 東京メレヨン会慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
29・11・3	10時	ソ聯強制抑留戦友会・東京ヤゴタ会 全ビルマ方面戦没者慰霊祭	靖国神社
29・11・3	12時	第21回ソ聯抑留中死亡者鎮魂慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
29・8・15	10時	筑後地区偕行会 戦没者慰霊平和祈念祭	久留米市忠霊塔
29・2・22	10時	爆弾三勇士慰霊祭	山川招魂社
29・5	12時	(公財) 千鳥ヶ淵戦没者墓苑奉仕会 千鳥ヶ淵戦没者墓苑拜礼式	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
29・10・18	13時	東部ニューギニア戦友遺族会 28年度秋季慰霊祭	千鳥ヶ淵戦没者墓苑
29・4・5	12時	(公財) 特攻隊戦没者慰霊顕彰会 靖国神社永代神楽祭(年次総会)	靖国神社
29・9・23	14時	第66回特攻平和観音 年次法要	世田谷山観音寺
30・3	11時	第39回特攻隊全戦没者 慰霊祭	靖国神社
29・8・15	11時	ハワイ明治会 盆法要	ハワイマキキ日本海軍墓地
29・3・20	15時	福岡県偕行会 招魂慰霊祭	福岡縣護國神社
29・5・4	15時	福岡陸軍墓地慰霊祭	福岡陸軍墓地
29・8・16	10時	戦没者追悼慰霊祭 田中静老陸軍大将顕彰碑慰霊祭	名古屋山靈園陸軍墓地 たつの市龍野公園
29・6・26	10時	宮崎県偕行会 宮崎県出身戦没者慰霊祭	宮崎縣護國神社
29・11・11	14時	山口県偕行会 山口県陸軍墓地慰霊祭	山口県陸軍墓地